

「隅の窓」 (E・T・A・ホフマン)

語り手の「私」の従兄は、「甘いのが大好きなドイツの讀者に氣にいられ」ようとして物を書いたりせぬ「竝外れた諧謔精神」を有する作家だったが、悪性の病ひで兩足の自由を失ひ、首都の大廣場に面する屋根裏の住居に籠り切りになつて、痛みを堪へつつ部屋の隅の窓から何時も廣場の雑踏を眺めてゐた。或日、「私」が従兄の許を訪ねると、従兄は肘掛椅子に坐つて迎へてくれたが、ベッドの天蓋の處に大きな紙がとめてあつて、ラテン語で「タトへ今ハ酷イトシテモ、イツマデモ酷イママニ續キハシナイ」と記されてあつた。

従兄は存外元氣で、今は窓が自分の「慰め」、「はつらつとした生活の出入り口」であり、廣場の「この世の營み」を眺めてゐると「作家修業の第一課」たる「ものを見る目を養ふ」事も出来るのだ、君に「作家魂」の何たるかを教へてやるから、一緒に眺めて見給へ、と勧めるので、「私」も附合つて廣場を眺め、行交ふ人々の爲人、來し方、生活の有様を想像して二人で對話

を交しつつ、人々の人生の物語を拵へて行く。やがて廣場から人々が立去り、雑踏が消えると、從兄が云ふ、この廣場は「人生の縮圖」だ、慌しい生の營みが途絶えると、「残された荒寥たる光景が時の経過を告げるのみ」。午後一時の鐘が鳴り、介添人が食事を運んで來た。僅かな量だが、ほんの一口でも餘計に食べると七轉八倒の苦しみとなり「生きる勇氣が萎えて」了ふのだといふ。「私」がベッドの天蓋の紙を指差した。「さうだとも！」と從兄は叫んだ。居た堪れぬ「悲哀」が「私」を襲ふ。「かはいさうな從兄よ！」との一句で作品は結ばれてゐる。

譯者の池内紀が書いてゐる様に、從兄と「私」は「輕妙な語り口」を驅使して廣場の人々の「虚榮心や權力欲やエゴイズムが見せつける滑稽な姿を手にとるやうに描きとめ」て行くのだが、その一々を紹介する紙幅は無い。が、從兄の物語る次の挿話だけは、作者ホフマン自身の「作家魂」を窺はせる好例として紹介して置きたい。

それによると、廣場に讀書好きの花賣り娘が店を出してゐて、以前、從兄が娘の店に行つたら、讀書にすっかり夢中だつた。從兄は「作家の虚榮心」から、娘が讀んでゐるのは「わが本にちがひないと思ひたかつた」ので、意を決して何を讀んでゐるのかと訊ねると、紛れも無く彼の本だつた。從兄は「喜びを押し殺し」、面白いかね、と訊いた。娘は頷いて、何度も讀んで

たのであらう、手際よく内容を説明してくれた。従兄は「甘つたるい聲」で、「有頂天になつた作家先生におさだまりの笑みをうかべて」、自分が著者ですと囁くと、娘はぼかんとしてこちらを見てゐる。「うれしい驚きのせむ」か、「かくも有名な作家と出會つた幸福が信じられないのか」。だが、彼女は「おや——まあ——でも——まるで——」と呟くだけ。従兄は強い「恥辱」を感じた。この純朴な娘は「本が一人の人間によつて書かれる」事も、「作家とか詩人とかがいかなるものか」も皆目知らなかつたのだ。従兄は悄然として退散するしかなかつたのだといふ。

單なる虚構ではあるまい。怪奇幻想文學の巨匠「お化けのホフマン」は短軀異相の奇人であつた。彼は「人間觀察者」であると「同時に鋭い自己觀察者でもあつた」(金森誠也譯)とロータースは評してゐるが、散文的な日常と怪奇幻想の非日常との間を自在に往來するホフマン文學の魅力はかかる「人間觀察」の、就中「鋭い自己觀察」の所産でもあつたのだ。

この作品を口述した二箇月後、ホフマンは死ぬ。脊椎カリエスで足腰が立たず、肘掛椅子に坐つて窓外の廣場を眺めるのを唯一の楽しみにしてゐたといふ。